

クロード・ロベルジュ先生を偲んで

In Memory of Professor Claude Roberge

安 昭八*

Shohachi YASU

Abstract: In memory of Professor Claude Roberge, Professor Emeritus of the Faculty of Foreign Languages, of Sophia University who died in September 2019, author would like to express an overview of how he taught French to first year students at the university. This is a summary of the teaching methods involved in foreign language education in which Prof. Roberge has passionate about introducing the research results of Professor Petar Guberina of Zagreb Language Education in Croatia to Japan.

Key word: Foreign Language, Teaching method, French, Sophia University

1. はじめに

2019 年 9 月に帰天された上智大学外国語学部名誉教授のクロード・ロベルジュ先生を偲んで、先生が上智大学外国語学部フランス語学科の初学生にどのようにフランス語を教えてきたのかその概要を紹介するとともに、外国語教育に係わる教育方法について先生の師であるクロアチアのザグレブ言語教育の故ペータル・グベリナ教授の研究成果を日本に紹介する研究を亡くなる直前まで情熱を注いできたかを紹介しようとまとめたものである。

2. ロベルジュ先生の功績

2.1 先生との出会い

ロベルジュ先生とは、筆者の大学院時代からの友人であった上智大学外国語学部出身の故大塚 建氏から紹介されてから 40 年近くの間、お付き合いをさせていただいた。初めてお会いした時から「ウマが合う」と勝手に思い込み、社会人になってからもロベルジュ先生の研究室を訪れ夕食や飲酒を楽しんでいた。カナダ・ケベック州出身の先生はスキーがお上手で、上智大学フランス語学科内では「ロベ・スキー」と称してロベルジュ先生が引率する形で学生達とのスキーを楽しみ、親睦を深めていたようである。筆者も個人的に先生とスキーを楽しんだ一人であった。また、スキー場は温泉場と決めており、先生は外国人には珍しく温泉大好きであり筆者と同じであった。先生との会食時に、先生の研究内容などをお話されることもあったが門外漢の筆者には、先生の意図している内容の百分の一程度しか解らなかったが、母国語以外の外国語を初めて教える際に、最も大切なことは文法論でなく、人間性に基づいたリズム・イントネーション等の動きを伴った言語教育が有効であると云う事実は筆者にとって自然と理解できた。

2.2 論文作成の支援

筆者が大学を退官し、某企業との共同研究継続のために総合技術研究所の客員教授となった 4 年前、東京都千代田区紀尾井町の上智大学内の SJ ハウスから練馬区上石神井のイエズス会ロヨラハウスに移られていた先生を訪ねたところ、「研究を継続したいので支援して欲しい」との要請があり、時間的に余裕があることと先生の蘊蓄のある話が楽しいこともあり引き受けることにした。

先生の論文作成支援はロヨラハウスを 2 週間に 1 度のペースで訪れ、先生の口述をコンピューターに記録し、それを元に論文の形態にまとめる方法で行った。論文に必要な資料等は先生から適宜提供を受け、先生の意向に沿って論文に掲載すべく資料を取捨選択してまとめた。

2016 年 1 月より開始した先生との打合せにおいて、筆者にとって、先生の個人的な経歴や経験を初めて知ることになり大変貴重な話を聞く至福の時を過ごすことになった。また、人として誠実である引導者に直接教えを受けているような心持であった。

1956 年、27 歳の先生は米国西海岸のポートランドから材木を搭載した貨物船に乗り、2 週間掛けて横浜港に入港し初めて日本の地を踏んだ。入港後、横須賀市田浦の栄光学園内のイエズス会日本語教育施設に入り、2 年間日本語を学んだことや、その後 4 年間、上石神井にある上智大学神学部で神学を学び、その後 1 年間広島教会で修行されたことなど思い出話を交えての打合せであり楽しい時間を過ごすことができた。このようにしてまとめた 2016 年度の論文は「日本で外国語を教えて 50 年」¹⁾であり、ロベルジュ先生は、50 年の間、生徒には理論よりもグベリナ教授が推奨したことば「Sound comes from movement」をフランス語教育に適用し、フランス語のリズム・イントネーシ

ョンをもっている「Bibi lolo」などのわらべうたを使って身振りによりフランス語学科新入生のフランス語の教育をしてきた。その内容は上智大学外国語学部紀要に掲載された。当該論文には記載されていないが、1964年、イエズス会の任務命令により上智大学フランス語学科でフランス語教育を行うことになったが、同時期に2年間のサバティカル教育が認められフランスのパリでフランス語の教育方法を勉強された。その間、パリの本屋さんでたまたま知り合った方が貴族であり、カソリック教の神父であるロベルジュ先生はその貴族の夏の別荘に招かれ、貴族の生活の一部を紹介してくれ興味深く聞いた。

2017年度の論文は、ロベルジュ先生の音声学・言語学の師である故ペータル・グベリナ教授の教えをまとめた「ペータル・グベリナ先生 明日に導く人」²⁾である。ペータル・グベリナ教授はクロアチアのザブレブのSUVAG(S: System U: Universal V: Verbotnal A: d'audition G: gubernia)センターの音声学教授であり、グベリナ教授が仕組みを作られたヴェルボートナルシステムが言語教育・音楽教育・発音矯正・聴覚検査および言語障害者たちの最初の訓練に供されているのを見学し、そのシステムの無限の可能性をロベルジュ先生は見出した。

2018年度の論文は、これまで日本語の論文であったが外国からの反応が少ないとの理由により、グベリナ教授の教えを忠実に伝えることを目的に、言語の研究において音声的な分析と構造的な分析を統合した全体構造的な考えを提唱され、その応用として外国語の言語教育に係わる講座、視聴覚教育をザブレブやパリで精力的に実践した。その内容を英語版として「Introducing Professor Petar Guberina」³⁾としてまとめた。

3. ロベルジュ先生の遺稿について

2019年度の論文作成は、ロベルジュ先生が外国語教育の初期段階で最も重要と位置付けておられた「話し言葉」の教育方法についてグベリナ教授の論文⁴⁾の趣旨を忠実に伝えるべく、亡くなる直前まで、当該研究者向けに論文を提示し、その趣旨を啓蒙すべく努力を惜しなかった。

論文を上智大学外国語学部紀要に投稿すべく頑張っていたが惜しくも亡くなり提出不可となった。しかしながら、亡くなった時にはほぼ論文の形態が整いつつあった。ここでは、ロベルジュ先生の遺稿となった論文の趣旨を述べる。

遺稿論文は、グベリナ教授の教えを忠実に伝えることを目的に、その教えの真髄である「話し言葉」に係わる論理的な考えやその効果について述べたものである。グベリナ教授の先生である *Ferdinand de Saussure* 先生が提唱した、言語の研究において音声的な分析と構造的な分析を統合

した全体構造的なアイデアを、グベリナ教授がさらに発展させ、欧州、米国での言語の研究に特別な考え方を啓蒙した。たとえば同じ音声でも数え切れない程の意味合いをもたらすことがある。それは我々の脳の中で、その音声をもつ最適な周波数の特徴が脳に刺激を与え、脳が選択してその音を聞き取りしている。さらに、その音声の前後の流れやトーンなどすべての状況を含めた音響全体に拠り、それに基づき聞き取りをしている。このような考え方が全体構造的な本質である旨をまとめていた。また、絶えず話したり、聞いたりする対話では、全体の流れて、身振りや手振りなど眼でみている映像が「ことば」と繋がって意味合いも深くなる。グベリナ教授が提唱した「Sound comes from movement」は正にそれを表したものであると云える。さらに、その応用として、外国語の言語教育や視聴覚教育にも適用された。

4. ロベルジュ先生の葬儀ミサ

2019年8月20日午後1時半、東京都紀尾井町の聖イグナチオ教会において、ロベルジュ先生の葬儀ミサが執り行われた。カソリック教司祭の葬儀は初めての経験であったが、司祭の葬儀であるため20数人の司祭が壇上に並び、故人の神に捧げた生前での言語教育に係わる業績の紹介や聖天への儀式が荘厳かつ静粛に行われた。その葬儀ミサ・告別式次第を以下に示す。

聖歌：(灌水・献香)

祈願：

ことばの典礼：(聖書朗読 答唱詩編 アレルヤ唱 (詠唱) 福音書朗読 説教)

共同祈願：

聖歌：1. 「みもたまも」

奉納：

祈願：パンとぶどう酒を捧げる祈り

叙唱：

聖歌：2. 「きよききよき」

主の祈り：

聖体拝領：

祈願：

告別式

聖歌：3. 「いつくしみふかき」

祈りへの招き：

聖歌：4. 「神とともにいまして」 (灌水・献香)

結びの祈り：

弔辞・弔電：

遺族の挨拶：

献花：

聖歌：

聖歌や詩編の時は、教会 2 階に整列していた聖歌隊の歌声がパイプオルガンの音色とともに教会内に響き渡り厳粛な心持になった。

納骨式

11 月 18 日、11 時からイグナチオ教会地下聖堂において、ロヨラハウス館長により納骨式が執り行われ、イエズス会専用の納骨堂に納骨された。

4.1 ロベルジュ先生の経歴



2019 年 8 月 20 日、聖イグナチオ教会にて執り行われたロベルジュ先生の葬儀・告別式で先生の経歴が紹介されていたので以下に示す。

1928 年 9 月 10 日 カナダ、ケベック州生まれ
 1949 年 9 月 7 日 イエズス会入会（カナダ）
 1956 年 3 月 1 日 来日
 1962 年 3 月 18 日 司祭叙階（東京）
 1964 年 8 月 15 日 最終誓願（パリ）
 1964 年～1966 年 パリとザグレブで特別研修（言語学の教授法）
 1966 年～1998 年 上智大学でフランス語教員
 1978 年～1996 年 上智大学 聴覚言語障害研究センター所長
 1998 年～2003 年 関東学園ヴェルボトナル研究所（聴覚言語障害研究）所長
 2003 年～2013 年 研究、関東学園顧問等
 2013 年 9 月～ ロヨラハウス

2019 年 8 月 9 日 帰天

5. まとめ

出会いから 40 年近くお付き合いをさせていただいたクロード・ロベルジュ先生が昨年、天に召され淋しい気もするが外国語教育のメソッドを啓蒙する熱意には感動するとともに生き様を教えていただいたような気がしている。本稿は、ロヨラハウス館長さんのご厚意により、先生が亡くなる 1 週間前に先生のベッドでお会いすることができた。その際、筆者に論文提出を託すよう腕を力強く握られた感触が未だ残っていることもあり、レビューの形でまとめることにした。

ロベルジュ先生と話をしている時、いつも筆者らの心の支えになっていただいたことに感謝する。

参考文献

- 1) クロード・ロベルジュ, 日本で外国語を教えて 50 年, 上智大学外国語学部紀要, 第 51 号 (2016), pp.39-56.
- 2) クロード・ロベルジュ, ペータル・グベリナ先生 明日に導く人, 上智大学外国語学部紀要, 第 52 号 (2017), pp.1-13.
- 3) Claude Roberge, *Introducing Professor Petar Guberina*, 上智大学外国語学部紀要, 第 53 号 (2018), pp.127-138.
- 4) Guberina.P., *La parole dans la Méthode Structuro-globale audio-visuelle*, Le Français dans le Monde, n.102, 1974, pp.49-54.